

# 町史

とっておきの話

261

新潟大学教授

崎尾 均

## 只見町の水辺林は未来への遺産(最終回)

―河畔林をどのように管理するか―

水辺の美しさは、水と砂(礫・岩)と森林の調和にあります。しかし、今では、貯水ダムで湖水となった河川、夏に水が枯れてしまう礫だけの河川、大部分が森林化してしまった河川が目立つようになりました。バランスを失った水辺は、河川本来の美しさが奪われただけでなく、生態学的な機能も失われてきています。



▲只見の自然を代表する雪崩植生と河畔林

### これまでの河川管理

河川管理は、これまで利水と治水を目的として行われてきました。つまり、ダムによって水を溜め、堤防によって洪水を防ぐという、いわゆる公共事業です。そのために堤外(堤防に囲まれた水が流れる部分)に分布する河畔林などの森林は、水の流れを妨げ、洪水の際には流木の発生源になるとして、伐採除去されてきました。しかし、近年、環境に対する意識が高まる中で、河川法が改定され、河川環境の保全も河川管理の目的に加わりました。ただ、実際には河川管理計画にも具体的な河川生態系の保全については、ほとんど言及されていません。

### 絶滅危惧種の保全

河川周辺の水辺は、さまざまな生態系の中でも、生物多様性が高いことが知られています。陸上の生物と水中の生物が

ともに分布し、その相互作用も複雑です。

只見町の河川にはヤナギ林が広がっています。なかでも伊南川の河畔林は、絶滅危惧種Ⅱ類のユビソヤナギの日本最大の自生地であり、その保全に関しては、これまでいろいろな議論が交わされてきました。それらの議論の中には、ヤナギは挿し木でいくらでも増やせるから、河畔林は伐採してもよいという科学的な見解を無視した乱暴なものもありました。

樹木が成長し繁殖していく上では、その自生している環境が非常に大切です。植物園に植えられた樹木は、根付いて成長していきませんが、そこで繁殖して個体群を維持できるかという点、そうではありません。とくに水辺環境を生息場所としているヤナギのような樹木は、生態系の微妙なバランスのもとで生活しています。しかも、ヤナギのような先駆種は比較的寿命が短いために、継続的に種子から稚樹が成長できる環境が必要となつてきます。

### 只見ユネスコエコパークの進む道



▲河川環境を考慮しない河川工事

只見町は二〇一四年六月十二日、ユネスコエコパークに登録されました。それは只見町全域および檜枝岐村の一部を含む七八、〇三ヘクタールという総面積をもち、核心地域、緩衝地域、移行地域により構成されています。

只見町の中で、ユネスコエコパークの核心地域に分布するブナやキタゴヨウなど奥山の森林だけが貴重というわけではありません。人間活動が行われている移行地域内に分布しているヤナギの河畔林もたいせつな生態系となっています。そのなかでも伊南川流域は、堤外(河川敷)が広く、河川攪乱に伴う流路変動が可能のために、自然度の高い

河川環境が維持されてきました。しかし、河畔林が核心地域に指定されておらず、いかに保全していくかが大きな課題となっています。その上、近年の河川改修により、ユビソヤナギの更新環境が改変され、集団の存続が脅かされています。いま必要なことは、水利用や防災だけでなく、ユビソヤナギなどの河畔林を含む河川環境の保全を含めた総合的な河川管理です。

### 価値ある景観とは

雪の多い只見町の代表的な景観としては、雪崩によって形成される地形や植生とともに、水辺を彩るヤナギの河畔林を上げることができます。標高の高い森林景観は、登山などを除けば、遠くから眺めて楽しむのが主流ですが、河畔林の景観は眺めるだけでなく、直接、河原などの水辺で触れることができます。その意味では、多様な生態系をもつ景観を保全し、ユネスコエコパークの価値ある資源として利用していくためにも、より自然な河川環境を創出していくことこそ、只見町の観光や将来にとって重要であると考えられます。